檀家廃止と「長屋寺院」

朝山実

2018/06/22 10:23

お寺にとっては切ってもきれない「檀家」制度を廃止し、信徒が集う「会員」制のお寺へ。「お布施」の明朗化、「収支決算」公表など大改革を行う「仏教界の異端児」住職に話を聞きました。

聞き手=朝山実(撮影も)

あらわれたのは、すっ、と背筋の伸びたお坊さんだ。

埼玉県熊谷市の**曹洞宗・見性院**(けんしょういん)住職の橋本英樹(えいじゅ)さんは、「仏教界の異端児」として知られる存在。寺院を訪ねたのは今年の5月のことだ。

ネット検索で「見性院」と打ち込むと、「みんなのお寺」という公式ホームページが出てくる。インターネットを活用し、住職のコラムを発信するだけでなく、境内の風景もパノラマ画像で見られるなど、お寺らしからぬ充実ぶりだ。

橋本さんの顔写真を拝見すると、歌舞伎役者のように眼光鋭く、ちょっとおっかなそう。歴史を重んじる仏教界の中にありながら、「遺骨」の宅配供養、「檀家」制度の廃止など、次々と思い切った改革を実践してきた。

いったいどういう人なのだろう？　というのが今回のインタビューだ。

「これ(送骨サービス)を始めるときには迷いましたが、やってよかったと思っています」(橋本住職、以下同)

送骨サービスというのは、希望者が遺骨を「ゆうパック」で寺院に送ると、永代供養してもらえる。橋本住職が始めたのは2013年から。

流れを説明すると、申し込むとダンボールの郵送キットが送付されてくる。キット込みの料金は3万5千円。依頼者は、届いた箱に遺骨を納めて返送するだけ。寺院の敷地内の納骨墓での共同納骨となるが、その後の管理料金などは一切ナシ。

本当に、この料金ポッキリ？　と念押ししたくなるくらい、近年増えているビル内の「永代供養墓」と比較しても破格に安価だ。

反響は大きく、利用したいという問い合わせがある一方で「けしからん！」と批判を浴びもした。わたしも何かの記事で知ったときは「ゆうパック」というモダンさに、お寺もドライになったものだという感想をもった。

ただし、調べてみると簡易さを優先してサービスを始めたわけではない。故人に遠縁の親戚しかないなど「行き場のない遺骨」の相談を受け、引き取り供養するようになった。当初は出向いていっていたが、遠方からの問い合わせも出てくるに及んで、現在の形式に至ったという。

ちなみに、ゆうパック以外の宅配便では規制上、遺骨を送ることはできない。送り状の品名欄には「遺骨」と記すことになる。

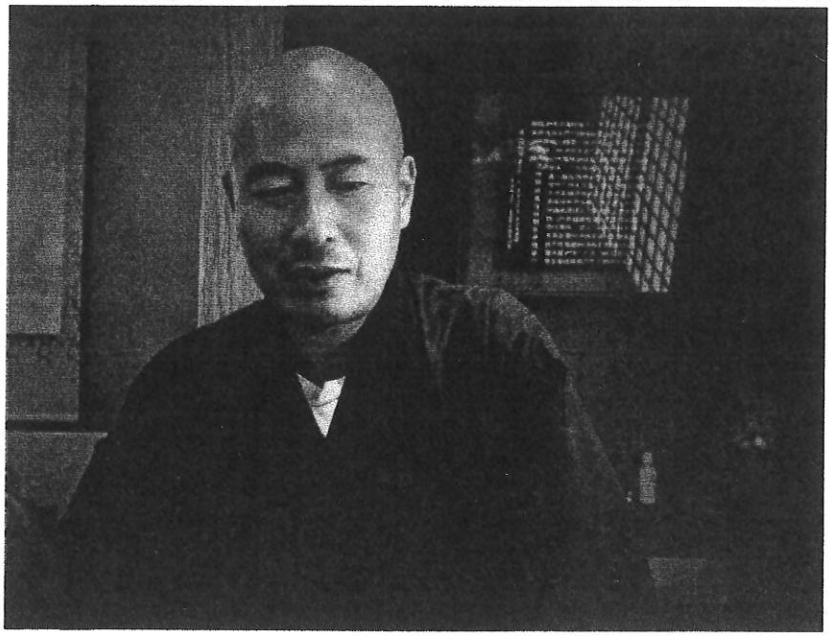
「数は少なくなりましたが、それでも月に 10 から 15 はあります」

インタビューの前に、境内にある共同供養墓を見せてもらったが、新鮮な供花に囲まれていた。墓参に訪れる人が多いということだろう。

「送骨」と聞き、侘しいものを想起しがちだが、実際に目にすると印象は大きく異なる。のちに寺院を訪ねてくる遺族や、法要を頼まれることも**「数は多くはないですが、あります」**と聞き、すこし安堵した。

――送骨だけでも年間 100 を超える数になりますよね。今後も増え続けていって、大丈夫なんでしょうか？

「これは先代に先見があったんでしょうね。永代供養塔の下が納骨堂になっていて、まだまだ置けるスペースがあります。さらに今年中には新しい納骨堂ができる予定で、500柱は入るようになっています」



ちなみに「永代供養墓」には、年数を限って個別に納骨した後、共同埋葬することも選択可能だという。期間によって供養料は異なるが、細かな料金はホームページなどで紹介している。「墓誌」に故人の名前が刻まれるので、「ニュータウン」に住まう感覚にちかい。さらに敷地内には、「戸建て」仕様の「宗派・信仰を問わない」霊園もある。

「昔は『(公営あるいは民営の)霊園か、うちの墓地か』で迷われていたんですが、いまは『うちの霊園か、永代供養か』で迷われた末に、永代を選ばれることが多くなり、新しく造った霊園が半分まだ売れていないんですよ」

次々と改革を実践し、将来を見通してきた感のある住職だが、「そこは、すこし目算がはずれました」と苦笑う。改革をこころよく思わない人たちからは「ビジネス坊主」と陰口を叩かれることもあるが、明快な話し振りにあるのだろう。

取材に訪れる数日前、曹洞宗のお坊さんたちが集まる規模の大きな会合が長野県で催され、橋本住職は講演者の一人として出席した。「仏教界を揺るがす大会で、若い人たちから賛同をいただきました」と声を弾ませる。

取材者であるわたしは宗教的なことに関しては門外漢だけに、橋本さんが「**画期的な大会**」と強調する意味合いを掴みかねた。改革を行うたび、仏教界から槍玉に挙げられ、正体を隠して指弾する「怪文書」が流布されるのは度々だという。

批判があれば、なぜ膝を交えて直に話さないのか。お坊さん同士なのに。

ヘンだなぁと思うが、「**ないんですよ**」という。

それだけに、宗門の県支部が主催する公式の会合に、講演者として招かれたのは、かつてない出来事で「**時代は変わりつつある**」のを実感しつつあるという。

「そこで私が言ったのは、『皆になるなかれ、一人になれ』。

足並みを揃えることも大事ですが、信念は一人ひとり持たないといけない。それは僧侶としての矜持でもある。そもそも『戒律』は、自己の意思で守るものですから」

橋本さんがその存在を知られるきっかけは、2012年に決断した「檀家」制度の廃止からだ。

見性院では、これまで寺院経営の基盤となってきた「檀家」制度(注=江戸時代に幕府が、キリスト教の拡張を防ぐため、全村民を近在の寺に登録させる「寺請制度」を取り決めた。結果、各寺院は住民管理の役割を担うとともに、檀家からのお布施という経済基盤を得た)を廃止している。

檀家に代わるものとして「会員」制度を発足させている。「家」単位の檀家に頼らず、個々人の判断で「信徒」となることを選択するものだ。

従来の「檀家」制度の下では、個人の意思とは関係なく〇〇宗の「檀家」と決められてきた。これはよくよく考えると、憲法が定める「信仰の自由」との関わりからしても問題がありそうなことだ。

橋本さんも同様の疑問を抱いてきたという。そして、住職でながら、個人の意思で見性院の信徒になるかどうかを選択する方式に改めることにした。

並行して、これまで「お気持ち」とされてきた「お布施」の金額を明示し、お寺の収支決算も公表する。そうした行動が注目され、テレビなどのメディアにも度々登場してきた。

――それで、今回のお聞きしたかったのは、橋本さんが、どうして仏教界からの批判、旧檀家さんの猛反対にも挫けず、改革を貫いてこられたのか。橋本さんの「個人」の精神的な背景を探りたいと思ったんです。

『お坊さんが明かす、あなたの町からお寺が消える理由』(祥伝社新書)や**『お寺の収支報告書』**(洋泉社)といった橋本さんの著書などを拝読すると、駒沢大学の大学院を卒業された後、30 歳になってから米国に留学をされていますよね。海外体験は大きかったのではないかと思うんですが。

「いろんな要素はありますが、確かに米国留学がなかったら改革はなかったでしょうね。

私の父親は、早くに両親をなくして、本寺を継ぐはずが、末寺に行かされ、若い頃に苦労しました。本にもすこし書きましたが、本山を乗っ取られたような格好で、後見人となる人もいなくて、孤独でもあった。だからこそ可愛い子供には旅をさせようという考えがあったのかもしれないですね」

橋本住職が、留学した先はロサンゼルス。当初は日系寺院の手伝いをしながら語学学校に通った。

「カルチャーショックは大きかったですね。これまで見たこともない世界でした。日系の寺院といっても、向こうのお寺は、日本のお寺とは違い、どこも解放的なんです」

――日本の寺院と何が違っていたんですか？

「いちばんの違いは、お寺に住職が住まない。

私は、ゲストルームに住まわせてもらっていたんですが、常時開放されていて、自由にお勝手も使わせてもらえました。まったく気をつかわず済んだということは驚きでしたね。

しかも、寺子屋のように、朝から晩まで人が出入りしている。茶道をやったり書道をやったり、いくつものサークル活動をやっていて、私もその手伝いをしたりしていました。

月に一度『祥月法要』といい、キリスト教の教会でいう日曜礼拝のようなものがあり、法要のあとはみんなで食事をとる。その場に常に活気がありました」

橋本さんが滞在した、曹洞宗別院の半径1㌔以内には、高野山別院、真言宗別院、浄土宗別院など、各宗派の寺院があり、宗派を超えた会合をもっていた。

「日本では、考えられないことです。もうひとつ、よかったことは『禅センター』という、曹洞宗のお坊さんたちがサンガ(共同体)をつくっていた。座禅で結びついている場所で、そこに住んで修行をしながら、会社に行く人は出勤し、残った人は座禅修行をする。

修行して、社会に出て、お金をためた人はそこへ寄付をする。その中には、あのスティーブ・ジョブスもいたんですね」

――面白いですね。しかしどうしてアメリカを選ばれたんですか？

「大学の指導教授が、禅センターを知っていたんですね。私も、行けば何か得られるものがあるだろう、と。どうするのかを決めず、行ってから考えようというぐらいのことでした」

――無鉄砲だなぁ(笑)。

「私の場合、いつもそうなんです。檀家制度の廃止にしても、いまやらなければということで始めたことで(笑)。

お布施の料金の開示にしても、仏教界からはものすごい批判を浴び、これはもう追放されるんじゃないか。反響の大きさに驚きましたが、やらないといけないと思ったからやったということです」

結果を見据えるより、見切り発車という橋本さん。留学中は「お寺って何なんだろう？」と考えるようになったのも大きいという。

☝供花が鮮やかな永代供養墓。裏手にまわると、納骨されている故人の名前が記された墓誌(戒名のあるものと俗名のものも)が並んでいた。

「あの、アサヤマさんは『永平寺　禅の世界』というテレビ番組をやっていたんですが、見られましたか？　半年くらい前だったか、NHKのオンデマンドで見ることもできますが。半分くらいは、世界の禅の紹介なんですよ。

いまヨーロッパだけでも300くらい寺院があって、曹洞宗の禅は、欧米で開花しています。

向こうの人たちは、『いまの日本には、自分たちが期待する道元さんの禅はない』と言い切る。世俗化してしまって、これからは自分たちが道元さんの禅をつくると言うんですよね。私も、ときおり海外に出ていったりすることがありますから、彼らが言わんとすることはよくわかります」

――もともとの仏教の原理を探求するほどそう思うんでしょうね。橋本さんは、留学をする以前はどんなお坊さんだったんですか？

「ふつうの人です(笑)。世間知らずのお寺の子ですよ」

——それなのに単身アメリカに行こうと？

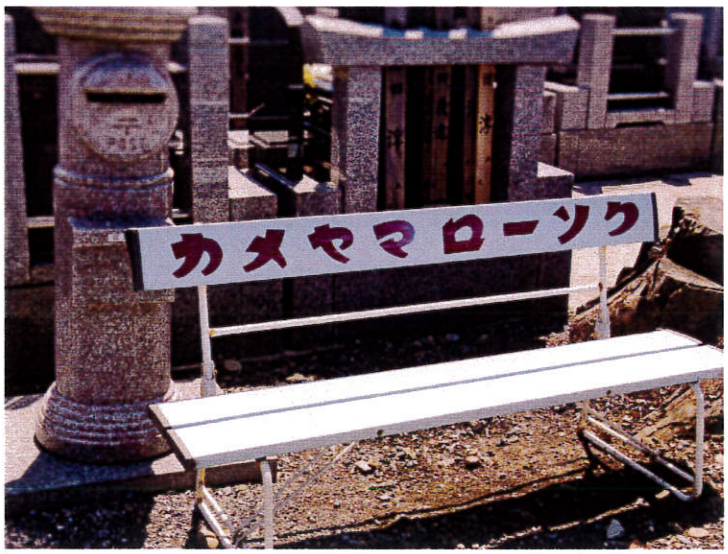
「そこなんですよね。それは、不思議とたぎるものがあったんですよ。というのは、このまま日本にいても、自分自身がダメになる。

駒沢大学の大学院にいた時は、大学に残って、教授になろうかという気持ちもなくはなかった。まわりに外国からの留学生も多く、それも中国や台湾、韓国、スリランカといった仏教の伝統のあるところから来た人が多かった。

その人たちとよく食事をし、向こうに旅行すると親切に案内してもらったりしました。向こうの仏教を見て、日本の仏教は堕落してしまっていると思いましたね。向こうのお坊さんは敬虔ですし、いまでも肉食妻帯はしていないんです」

日本では、明治政府によって僧侶の妻帯が公認され、以降定着してゆく。門外漢ながらわたしが疑問に思うのは、仏教の根幹に関わることを時の政治権力が決め、仏教界もこれに従ったということだ。キリスト教でいうならローマ法王を無視して一国の大統領が口出しするようなものだろう。

以前タイを旅行して驚いたのは、いまでも女性が僧侶の身体に触れることはあってはいけないことだとされていて、飛行機に黄色い法衣姿の僧侶が乗る際に男性乗務員が最後に案内をするなど、厳密に教えが守られている。



「学生のときに各地のお寺に泊めてもらうんですが、とくに台湾の人は、ちょっとでも私がお金を払おうとすると、『あなたは学生でしょう。自分たちはお布施をすることによって功徳を得ているんだから、気を使う必要はない』と言うんです。

やって来た人を歓待したり、泊めたりするのは当たり前だし、何か用事があったとしても、自分のことよりも、その人のことを優先する。そういうことが生きていましたね。

日本の仏教界では、僧侶同士がともすればいがみ合っていたりするんですが、向こうでは、兄弟のように接しているんですよね」

――そのときの体験は、いまも生きている？

「寺院の方針としている、胸襟を開いて『来るものは、拒まず』というのは、そのときの体験がもとになっているかもしれません。

拒まず、ということで言うと、刑務所に入られていた人を受け入れたこともあります。残念ながら、その方は半年でやめてもらうことになりましたが。ほかにも、いろいろ事情があって、在籍していた寺を追い出され、どこも引き受け先のないお坊さんを受け入れるということはやってきています」

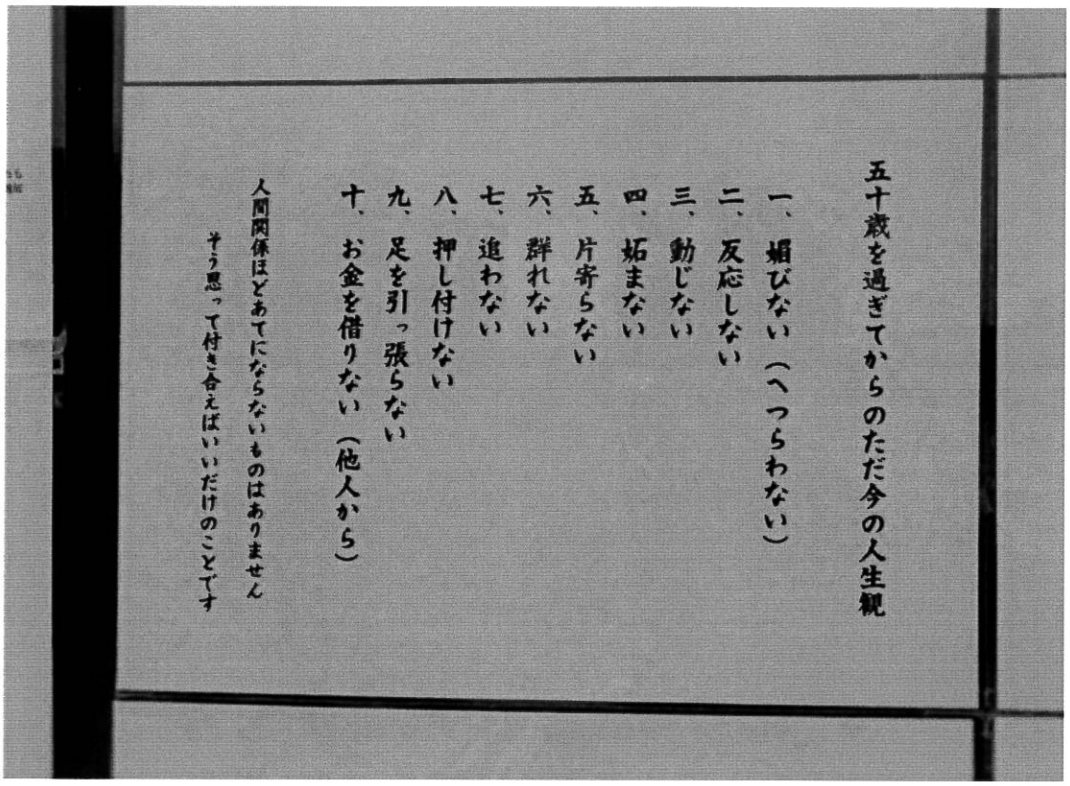
お寺は厳しいタテ社会でもある。仏門に入ったものの、人間関係の悩みなどからドロップアウトするお坊さんも少なくないらしい。橋本さんは、行き場をなくしたお坊さんを何人も受け入れてきたという。なにやら「お坊さんの駆け込み寺」ではないか。

「物好きというか、まあ、うちはそういうところなのかな、と。そういうことでは、おっしゃるように、駆け込み寺かもしれません。ただ、それによって得るものは、あると思っています」

見性院には、常駐する5人の僧侶と、寺院の名前を使うことを許された僧侶が5人。あわせて10人の僧侶がいる。

地方の寺を追い出されたと聞くと、ヤンチャな若い僧侶を想像しがちだが、橋本住職と年齢は違わないか年上だという。

「いま、うちの最年少は 25 歳。その彼が来るまでは、私がいちばん若かったんですよ(笑)」



☝境内の掲示版には様々な案内、住職の言葉が張り出されているが、その中の一枚に見入ってしまった。

――これから、このお寺がどうなっていくのが良いと考えられているんでしょうか？

「いま、うちの最年長は 73 歳で、その人が言うには『働けるだけ働いて、ポックリいきたい』(笑)」

――ぽっくりって(笑)。

「というのも、お寺には定年がないんですよ。みなさん誤解されるんですが、僧侶というのは職業ではありません。生き方であり、修行者なんです。 ですから、彼は修行をしながら、ここで死ねたらいい。先日、73 歳になったと言われたので、私が『75 歳までぐらいですかね？』と言ったら、『いえ、80 までは』と言われましたが(笑)」

――面白いですね(笑)。

「えらく、笑われておられますが。老後ということでいうと、一度、ヨハネ・パウロ2世に会う機会があったんです」

――曹洞宗とカソリックに交流があるんですか？

「はい。それは、私がお世話になった永平寺の僧侶で、上智大学を出られたあとミュンヘン大学に留学された異色の人物がおられ、その恩師と2週間、ヨーロッパに勉強に行かせてもらったんです。

滞在中、修道院に泊まらせてもらいましたが、カソリックの神父全員が独身なんですね。永平寺以上にすごいと思ったのは、大きな修道院の中に、生活に必要なすべての施設が整っている。

食堂はもちろん、修繕したりする大工さんもいる。修道院がひとつのコミュニティになっていて、最後を看取るための介護施設もある。これはすごいと思いました」

橋本さんは、ゆくゆくは、あのとき圧倒されたコミョニティのような寺院をつくりたいと夢を膨らませるようになったという。

「そうなんです。いまの私の夢は、大家族のお寺です」

――大家族と言うと？

「一寺院の一住職にできることは限られています。日々、いろんな付き合いに忙殺されて、時間がないんですよ。

私の父親は、教員をやりながら塾をし、シンポジウムをし、PTA の会長をやり、永平寺の役員もやって、ともう大変でした。しかし、もう住職がひとりで何もかもやるという時代じゃない。『お坊さん便』のような、僧侶の派遣サービスが出てくる時代なんですから、みんなで支え合わないと」

――支え合うというのは？

「昔、長屋があったでしょう。じつは、あれはよく考え抜かれた合理的なシステムだったんですよね。共同の井戸があり、足りないところは住人同士で助け合う。私がいま考えているのは『シェア寺院』です」

――長屋のような共同体の寺院ということですか？

「そうです。ひとつのお寺に、お坊さんが 10 人いて、大家族のようにやっていけたらいい」

――それは、お寺の長男が跡を継ぐという発想から脱していこうということでしょうか？

「そうです。血縁に縛られず、志を同じくする人たちでやっていこうとうことです」

――曹洞宗という宗派の枠をも超えて？

「いま日本に寺院は約7万6千ありますが、数が多くて身動きがとれず、このままだと仏教界はタイタニックです」

――「タイタニック」といえば、昔ジーン・ハックマンが神父を演じ、救出劇のリーダーとなる映画がありました。橋本さんは、そういう救難の旗振り役になろうと？

「私が異端児だといわれているのは、認めます(笑)。しかし、異端児になるにも、ちゃんと理由があって、昔から『何でなんだろう？』と疑問に思うことが仏教界には多すぎる。

自分がおかしいのか、仏教界がおかしいのか。

ここで自分が頑張って風通しをよくしないと、若い人たちが仏教に対して希望をもてなくなる。疑問に思ったことは言える社会にしないといけないし、失敗した人間に対して寛容に見守っていけるような社会にしていかないといけないと思っています」

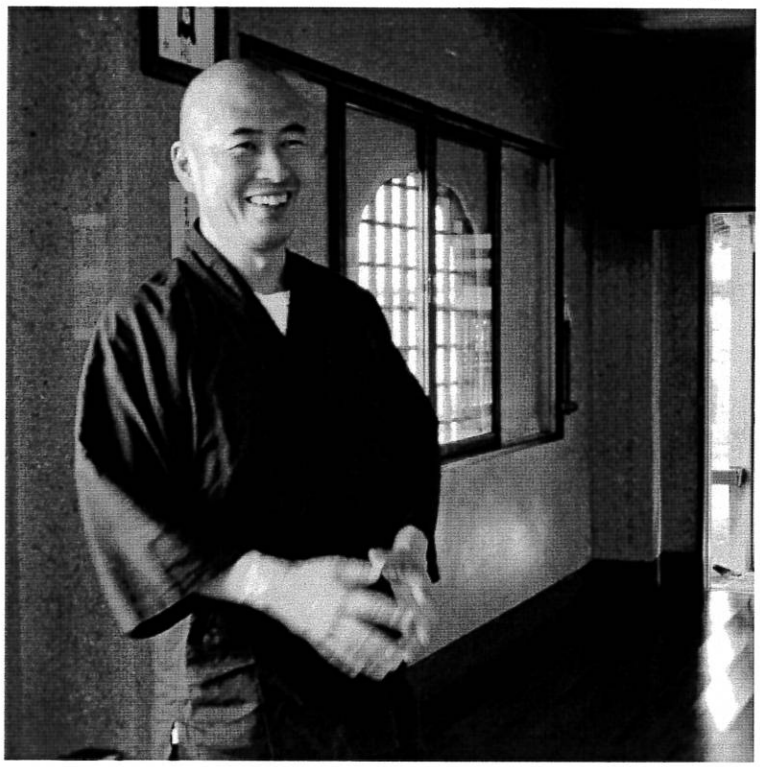
橋本さんの話にうなづきながら、わたしは迷っていた。目の前のこの型破りの住職に、自身が体験した話をしてみたい。しかし、どんな反応がかえってくるのか予想がつかない。どうしたものか……と。

橋本英樹さんが、先代の父親のあとを継ぎ、見性院の住職となったとき、最初にとりかかったのは、**「本堂の窓を透明なものに付け替える」**ということだった。

すり窓ガラスを付け替えることがいの一番にとりかかった改革？

キョトンとしているわたしに、

「外からでも、中が見えるお寺にしようと思ったんです」



――ああ、そういうことですか。そういえば田中康夫さんが長野県知事になった際、知事室をオープンにされて話題になりましたね。

「そうです。私もあれを参考にしました。『住職の顔が見えない』と言われたこともあって。ずっとお寺の中にいると、自分では気つかないうちに、外のことが見えなくなるんですね。

もちろん、お寺は商店じゃないですから。聖域的な部分も必要なんでしょうけれども、日本のお坊さんには、そこまでの神秘性もないですし、わかりやすく開かれたお寺にしていかないといけないと思った

んです。

次にしたのが、掲示板。お布施の料金体系を張り出したのもそうですが、見性院として、いま何をしようとしているのかを伝えていくことをはじめました」

お布施の料金を明示し、お寺の収支決算もオープンにする。なんだか会社のようだが、「清潔感を出したい」との考えからだという。

橋本さんはシャッター街の商店にたとえ、檀家が減少する一方の寺院が生き残っていくには、経営的な視点や寺院としての独自性が必要だという。

「残っていくのは、商店なら、そこに行かないと買えないものを売っているお店ですよね」

――インタビューの前に、お寺のまわりを見せてもらいました。永代供養塔の墓誌が二通りあるんですね。「戒名」のあるものと「俗名」のものと。

「じつは最初、俗名のご依頼はお断りしていたんです。何故かというと、戒名をつけておられる人に悪いと思ったんですね。

自分たちは戒名を付けてもらっているのに、付けてない人たちと同じ扱いになるのかと言ってこられる人が出てくるだろう、と。それで一年くらい、俗名で、と言われる場合はお断りしていたんです」

――一挙に変えたわけではなく、変遷があったんですね。

「そうです。いまにして思うと、悪いことをしたなと思っています。仏教は差別しちゃいけないと言っているんですから。

そもそも、なぜ戒名をつけるのかということですよね。

戒名は、いうなればクリスチャンネームのようなもので、仏教徒になった証です。キリスト教と異なるのは、生前に授かるのではなくて、亡くなってから遺族がお金を払って付けてもらう。後付けだというこ

とです」

――キリスト教だと、自身の意思で洗礼を受けて信徒になる儀式を設けているのに対して、日本は「家」単位でどこのお寺の「檀家」と決められ、修行せずとも死後に戒名ひとつで「仏さん」にランクアップさせてしまう。ヘンですよね。

「ランクアップかどうかわかりませんが(笑)。俗名だと浮かばれないとかいうようなことは、もともとの仏教の教えにはありません。

私が考えるに、信仰だと思うんです。戒名の四文字の言葉には、その人の人生があらわれる。よくできた戒名だと、『ああ、お母さんにピッタシだよね』と言ってもらえる。戒名を付けることでケジメがつくというんでしょうか」

取材者のわたしも、父の葬儀後に戒名について勉強してきたこともあり、ここまでの戒名の話は無理なく理解できた。へーと思ったのは、次の説明だった。

「しかし、みなさんあまり理解されていないのは、戒名を頂くということは授かった住職に帰依するということでもある。住職の弟子となるからには、その住職を尊敬できないといけないわけです」

――ああ、なるほど。

「そうなんです。古くからの檀家さんでも、戒名のことは、家柄や体面的に付けるくらいにしか考えていなかったりしますから」

戒名を授かることで、弟子になる。ブッダの弟子になるというくらいの認識しかなく、命名したお坊さんと師弟関係を結ぶということまでは考えていなかった。ということは、尊敬できないと思うお坊さんに付けてもらうのは、故人としては不本意だろうから、やめたほうがいいということになる。というか、なんだかよく知らない、お葬式のときに初めて会ったお坊さんで、いいんだろうか……。モヤモヤしだした。

「うちでは、俗名を希望される人が増えてきていますが、それでも戒名を欲しいという人もいらっしゃいますので、見ていただいたように、いまは並存していこうと思っています。

うちは『みんなのお寺』ですからね、望まれるのであれば後付け戒名もよし、このお寺がいいと思われたら入信していただけるのもよし、逆に、気に食わないというのでやめられるのもよしです」

――びっくりするくらい柔軟ですね(笑)。

お寺さんによっては、俗名では墓に入れられないと言われるところが多いように聞きますが。先ほどのお話から、橋本さんもまた迷われるし、考えを変えられてきているということですか？

「変わっていっていますし、悩んでもいます」

――じつは、戒名について、ひとつ住職に話を聞いていただきたいことがあったんです。

わたしの父親は東日本の震災があった年の同じ月に亡くなったんですが、その際に父の戒名をわたしが付けたんですね。震災ではなく、関西に暮らしていて老いによるものなんですが。

「同じ年だというのは、覚えやすいですよね」

――ええ。それで、おおざっぱに経緯を説明すると、宗教学者の島田裕巳さんが書かれた本に、戒名は本来の仏教にはない、日本の仏教独自のものである。だからお坊さんでなくとも、故人のことをよく知る者がつけるのもありだと書いてあったので、父が元気なときに「僕が戒名を付けようか」と口にしたら、父が面白がったんです。

父自身は、親戚の法事や老後は近隣の葬儀には欠かさず出席する人だったんですが、檀家だったお寺の住職のことは「先代はよかったのに、いまのはお金ばっかり言う」と毛嫌いしていたこともあり、亡くなったときに、父とそういう話をしたのを思い出したんです。

「ええ、ええ」

――後々、勉強していくと、仏教徒でもない者が付けるのもと思い直しましたが、ただ当否はともかくとして、やってよかったと思うのは、父とは家族として暮らしていた少年期は殴られた思い出しかなかったのが、戒名をどうしようと考えている最中、動物園にふたりして行ったことなど、忘れていた出来事をいっぱい思い返すきっかけになったことです。

「ああ、なるほど」

――ただ、困ったのは、住職にお話したとん、烈火のごとくお怒りになり、「ひとのビジネスに手をだす気か！」「墓も出ていってもらう」。そこまで言われるとは考えてなかったので、あわてました。

「そうですか、大変でしたね。墓を人質にするというのはよく聞く話ですが、そういうことがあったんですか。では、今日ここに来られたというのは、そういうことがあって、アサヤマさんは仏教について興味をもたれたということですか？」

――はい。父の死後に、戒名とは何か。仏教について勉強したりするようになりました。それまでは、家の宗派が何なのかも知らなかったですから。

「それで、菩提寺との住職との関係はどうなったんですか？」

――郷里は、昔は田んぼばかりの農村で、お墓も集落の共同墓地にあったので、管理組合の方に相談したら「それはお坊さんが言い過ぎだ」となって、お墓の問題は収まりました。

「不幸中の幸いでしたね。そういうふうに揉めたときに『お墓は出ていってもらう』と言われたというのは、よく耳にします。私は、一度もそういうことは言ったことはないですが(笑)」

――お墓の件は考えにはなかったので、父の納骨を拒絶されるだけならともかく、祖父母や母親の骨も持ち出せと言われ、うろたえました。

「そうですよね。たいがい、皆さんそこで腰が砕けてしまうんですよね」

お坊さんを相手に、こんな話をしたものかどうか。話す直前まで、迷っていた。島田裕己さんの名前を出すだけでも、お坊さんや葬儀業界の人たちの中には、嫌悪感を示されることが少なくない。ところが、橋本さんは笑顔で「好きですよ」という。変わったお坊さんだなと思った。

そういえば挨拶を交わしたときに橋本さんから、二枚の名刺をもらったのだった。

一枚は「曹洞宗見性院・住職」。もう一枚は「善友会（超宗派僧侶の会）代表」だった。

善友会には、宗派を超えたお坊さんの勉強会のほかに、僧侶派遣事業も含まれている。

Amazon で、お坊さんを派遣する「お坊さん便」が始まったとき、仏教界から猛烈な抗議が起きたことからニュースにもなったが、意外なことに登録を申し出るお坊さんが多かったという。

橋本さんは、インターネットを使ったお坊さんの派遣に対して、批判的ではない。肯定派というか、橋本さん自身が、副住職時代には、斡旋されて法要に出ていく体験を積んだという。そうしたこともあり、現在は独自にお坊さんを紹介し合うお坊さんの互助団体の代表も務めている。

「お寺はどこも檀家の数は減少する一方で、法事やお葬式の数も限られ、やっていけないのが現状です。いっぽう、お坊さんを派遣してほしいという要望は県内に限らず、東京や近県からもあります。

派遣で良いことは、そこでいろんな人に会い、いろんな話を聞くことができる。私は、37 歳のときにすでにそういう経験をしてきたおかけで、葬儀ビジネスのことにも詳しくなりました。それがいまにつながっています」

――ネットの僧侶派遣業に対しては、仏教界から「お布施」を定額化するのはおかしいとか、利用者が支払う料金の半分くらいを運営側が得ることへの批判があるようですが。その点は、どう考えられていますか？

「たしかにバックマージンは悪です。裏金ですからね。ただ、いい悪いはともかく、そういうふうにして成り立っているのも事実なんですね。

これは考え方なんだと思います。

お寺というものは、ホールを掃除したりする人も含め、皆がやっていけるようにしないといけない。お布施としてもらったものの中から、そういう人たちに還元させていくことも必要だと思うんです。

それに、お布施は、お坊さん個人がもらうものではない。ご本尊に対して差し出されるものであって、浄財なんです。

あとは割合の問題もあるでしょうね。仮に頂いたお布施が 10 万円としたら、5万円をバックにとられる。なかにはそれ以上ということもある。これが適正でないとなれば、いずれは破綻するでしょう」

――ネットの派遣僧侶が話題になる以前から、葬儀屋さんがお坊さんを紹介した場合、お布施の何割かを葬儀社に返すというのは耳にしました。紹介料としては、あってもおかしくはない。その割合というのは、どちらの立場が強いかなんでしょうか。

「ひどいところだと、6割(業者側の取り分が)ということもあるそうです。しかし、ないよりは、いいという考えもあるでしょうし。ヘンな話、我々は『どうですか？』とこちらから宣伝するわけにも行きませんし、世の中が派遣僧侶を必要としているのであれば、無視するわけにもいかないでしょう」

――お葬式にお坊さんはいらないという考えの人も出てきている中で、ネットであれ、それでもわざわざお坊さんを頼むということがある意味驚きですが。

「そうなんです。お寺社会では、ネットで葬儀社を選んだり、僧侶を派遣してもらったりすることは悪として語られていますが、これだけ世の中が変わってきているんですから。私が言うのは、『お寺はどこも温室育ちでやってきたけれど、これからは雑草のようになっていかないといけませんよ』。そういう考えから、うちでもお坊さんの紹介をしていますが、困ったときにはお互いが助け合うということでマージンは設定していません」

という話をしているうちに、約束の一時間どころか二時間を超えようとしていた。次の来客もあり、ここでインタビューを終え、本堂を若いお坊さんの案内で見せてもらうことができた。

☝本堂を案内していただいた、見性院最年少僧侶の小松さん。笑顔がいい。ということで、すこし小松さんにお話をうかがいました。

(もう少しつづく)